



TITLE:

岡先生の通信添削

AUTHOR(S):

久保田, 忠利

CITATION:

久保田, 忠利. 岡先生の通信添削. 西洋古典論集 2001, 別冊: 104-105

ISSUE DATE:

2001-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/68707>

RIGHT:

岡先生の通信添削

久保田 忠利

学生時代の記憶がだんだん曖昧になってきている。記憶の中にある一枚の写真には、研究室の秋の遠足で岡先生や中村善也先生と同じ敷物に車座にすわって栗だか蜜柑を食べている光景が浮かんでくる。先生の授業の記憶は、若林浩子さんと大西英文君が出席していたのだから4回生の時のことであろう。やがて先生の学位論文となり、後には『ホメロスにおける伝統の継承と創造』として出版されることになる叙事詩の環を扱った研究であった。しかし、当時無知であった僕には、なにが問題であり、なぜそのような煩雑な議論をするのか理解できないでいた。ネオ・アナリーゼという語がしばしば発せられたのを記憶している。研究者の氏名以外はほとんど板書することがなかったため、ひたすら筆記に専念していたが、記述が追いつかなくなることがたびたびあった。ある時、例によってやむなく手を休めていると、隣のやや斜め後ろにすわっていた大西君が休むことなく鉛筆を走らせているのに感心していたが、ふとその手元に目をやった。すると彼はノートの余白を黒く塗りつぶしているのであった。勝手ながらそれ以来大西君には大いなる親近感を抱いているのである。

大学院を終えてからも岡先生にはいろいろお世話になったが、10年ほど前には改めて大変な教えを受ける機会に恵まれた。それは岩波版ギリシア悲劇全集が刊行されはじめ、ソポクレス断片の翻訳に関わったときのことである。各訳者の担当部分の初稿が出てしばらくして、全集編集担当の田中博明さんから電話があり、各断片作品の作品解説部分と各断片の典拠部分をもう少し短くしたいので手伝って欲しいとのことであった。ほかの訳者は皆関西在住であるのにたまたま僕だけ東京近くにいたため、膝をつきあわせて相談しながら作業を進めるのに都合がよかったからであろう。91年秋のことであったと思う。何度か全集編集部を訪れ、校正担当の小松勉さんも交えて、縮める作業を進めた。そのうち、訳文の文体をそろえることや、一部の訳文を修正する相談も受け、その範囲で作業を進めた。そしてそのような作業を終え、各訳者も見直した再校が出た段階で、岡先生は、田中さんの要請もあって、编者という立場でその再校を読むことになったと思う。やがて、電話があり、岡先生から原稿が戻ってきたので悪いけれどもちょっと編集部に来て欲しい、と要請された。田中さ

んはちょっと困った様子で、先生がたくさん赤を入れてきている、といわれた。初めのうちは訳者の事を慮って、その訂正箇所を見せてくれなかったが、それでは作業がスムーズに進められないので、結局は3人で読み、検討しながら行うことになった。先生の指摘は、解説部分、断片本文訳、典拠の訳および解説とすべてにわたっていた。解説については不正確である、分かりにくいといったことであったので、その訂正は比較的やりやすかったが、困ったのは本文訳である。明らかな誤訳の指摘から、解釈の違いに属するもの、日本語の措辞に関わるものなど多岐にわたっていた。本来なら各担当訳者に先生の訂正原稿を渡し、それを基に検討して訳し直したものを送り返してもらうべきであったろうが、そのような時間的余裕はなかった（今ならファックスで送り、eメールで返事をもらうことが可能であろうが、当時はファックスでさえ家庭に普及していなかった！）。先生の指摘は赤鉛筆と青鉛筆とで記入されていた。ところどころに疑問符や感嘆符がついており、時には「注意！！」と感嘆符を二つも三つもつけてあるところもあった。そのような箇所を目にすると、授業の準備で忙しい折りに、深夜、書斎で（一度だけお邪魔したことがある）テキストを丹念に読み、ある時はため息をつきながら、ある時は「あほ」と呟きながら（先生が「あほ」と叱責されるのを聞いたことはないが）、ある時は苦笑しながら、厳格な注意、訂正、指摘を書き込み、感嘆符を一つ、二つと静かに力を込めて記されている先生の姿を想像した。そこにはもっと正確に読め、もっと厳密に読め、もっと深く読め、という先生の厳しくも暖かいメッセージがこめられていたと思う。

これと同じことは、93年初頭に繰り返された。エウリーピデース断片翻訳の時である。先生の手を煩わすことなくよい翻訳を作成しようと努力したのであるが、岡先生はこのときもまた遺憾なくその炯眼ぶりを発揮し、僕（たち）の誤りを見逃すことなく、誠実に精力的に仕事をされ、多くの書き込みをしてくださった。自分の浅学非才ぶりに忸怩たる思いを抱きながらも、それらを読む幸運に恵まれた僕は、実に得難い特権的個人教授の時を享受したのであって、先生のお仕事に密かに「通信添削」と名付け、折に触れては思い出し、今なお深く感謝しているのである。先生のそのような炯眼をなお免れて僕の誤訳が一つ残ったのは、岡先生もまた人間的であったのだ、と懐かしく思い起こしている。

2000年11月6日